白梅学園短期大学　教育・福祉研究センター研究年報　No.10　4～23（2005）

大学での「世代間交流広場」の実践
―― 地域における子育て支援・相互発達をめざして ――

金田　利子・山路　憲夫・瀧口美智代

Ⅰ　問題および目的

今日，主として少子化対策から様々な「子育て支援」の方策が講じられているが，対症療法の域を出ていないように思われる。世界に類を見ない少子・高齢化の進行が問題になってきているが，それ自体否定的に捉えてよいかどうかも議論[1)]のあるところであるが，どの様な立場から見ても共通して言える少子化の根本問題は，社会自体が子どもを産み育てることに希望がもてなくなってきているところにあるのではないかと考えられる。地域全体を子どもが育ちやすく育てやすい発達環境にしていくことが求められる。それは直接子育ち・子育てに関わる親子のみならず，地域に住むすべての世代の人々が相互に発達的に必要とされ合うような環境を意味する。そうなれば，生まれてきた子どもにとっても，育てる側にとっても，育ち・育ての見通しが立ち，居場所ができる。言い換えれば世代をこえて必要とされ合う地域づくりが間接的な子育て支援につながるのではないか，また，そうした地域の創造なしには，子育て支援の個々の施策も，少子化対策につながっていかないのではないだろうか。現にエンゼルプラン以降いくつもの施策が実行されているにもかかわらず少子化に歯止めが掛かる兆しは見られない。

世代間が交流しあえる地域は，すべての人にとって生活に見通しがもてる場になり，子育ち・子育てにも展望がもてるのではないか。本研究はそうした大きな仮説のもとに行うものである。

このことを本格的に実証するには，実験的自治体づくりという大がかりなものになることが求められる。ここでは，その一端を科学化していくことを目指し，先行実践・研究にもあたりつつ，足元の地域である小平市に位置する白梅学園における「子育て広場」においても，広い意味で実験的に世代間交流の広場を設け，そのことの意味を明らかにしたいと考えた。そして，実践的に取り組み，そこから得られた成果と課題について検討することを目的とする。

Ⅱ　先行研究・実践

1．世代間交流と人間発達に関するもの

（1）地域における高齢者と子ども（乳幼児期～学童期）の交流

1）様々な取り組み

近年，高齢者と乳幼児がともに生活し共に必要とされ合っている場が多くなってきている。東京都内で比較的早くから行われているところには，江戸川区の江東園[2)]がある。ここではこれまで同じ法人で老人福祉施設と保育園を池を挟んで別々にあったものを1987年に合築し，以来両者の交流を日常的に進めるようになったという。こうしたところは全国的にもかなりあるものと予想される。

また，2000年の介護保険法施行を機会に特定非営利法人（以下NPO法人と略記）がはじめたデイサービスにおいて両者の交流の視点を持って運営している施設も徐々に増え始めている。東京では，小金井市にあるNPO法人「子どもとお年寄りの家『鳩の翼』」[3)]や，練馬区北町にあり，北町商店街が運営主体になっている「NPO北町大家族」[4)]が日本で行われた国際家政学会の世代間交流をテーマとしたポストコングレスにおける「スタディツアー」[5)]の対象となっている。

また，学童保育の「指導」に高齢者が当たっているところもある。しかも三重県桑名市にある医療法人と社会福祉法人が結合して運営されている「ウエルネスグループ」[6)]では，認知症の高齢者が

部分的な「指導員」になって双方が役立ち合っているという先進的な事例がある。認知症は今すぐ前のことは忘れても「昔取った杵柄」まで忘れるとはかぎらない。釜でご飯を炊くことなど手作りの生活技術はもちろんであるが，それだけではなく，ものを書くときの姿勢などについてもきちんと指導しているし，さらに算数や国語も支援しているという点に発展が見られる。

その他，部分的に，地域において高齢者と乳幼児が交流している例は相当数に上るものと予想できる。

松村[7]は，社会福祉法107・108条により地域福祉を推進する方策として「市町村の地域福祉計画」「都道府県地域福祉支援計画」の策定が規定（2003年4月）され，その年度から各地で地域計画づくりに取り組みはじめていることに着眼し，「地域福祉計画」を世代間交流の視点から点検した。

方法としては2004年度の早いうちまでに「地域福祉計画」の完成した自治体を対象に世代間交流が位置づけられた実践が予想されているかについてアンケートを行った。その結果とそこからの考察について次のように述べている。「世代間交流を取り上げている自治体であっても，交流の内容は民家や空き家を利用した交流の場づくり等，類似のプログラムが多く，地域独自の提案が少なかった。これは，住民も含めた地域福祉計画策定者が自分たちの住む地域の各世代の生活の現状と課題を把握していないからであろう」と。

上記の研究はあくまで，自治体の施策としてのものである。自治体の策定計画の中に位置づけられるまでに至ってない場合でも，垣間見る情報からだけでも各地において，様々なタイプの高齢者と子どもとの交流実践が芽吹きはじめているのではないかと予想できる。

こうした高齢者と乳幼児あるいは学童が交流し合う実践は，実際にはどの様なタイプがあるのか，また各タイプの取り組みは，全国的にどの様に分布しているか，その質的量的実態に関する全国的調査はまだ見られておらず，そのこと自体が一つの研究になるくらいの価値があると思われる。したがって，この調査については次年度の研究課題とし，ここでは筆者らが今回実験的に取り組んだ実践の参考とするため，今日なされている取り組みを大まかに捉えるにとどめておく。

2）世代間交流の考え方の点で

数年前から，全国的に注目を集めているのが，富山市にあるデイケアハウスの「このゆびとーまれ」[8]の実践である。全国的に知られている先に挙げたいくつかの実践の場においても，世代間の相互交流は，双方にとってその存在が生かされるという視点が貫かれているものと思われる。富山市にあるこのデイケアハウスもそうなのであるが，明確な言葉で「人は必要とされるときに輝く。そしてそのとき本当の笑顔が生まれる。」という理念を打ち出している点，また相互に育ち合う事実を映像によって明らかにしている点で注目を集めている。とりわけ，筆者らが着眼したのは「子どもからお年寄りまでお互いに相乗効果がある」としている点である。そこからは，筆者らが捉えてきた異世代異発達の人たちがそれぞれの発達期の中心となる活動（主導的活動）が相互に生かされ合って相互に存在感を味わい輝くことができるという異世代異発達の発達的交流の理論と一致する実践版とも言える姿がみられるからである。

このケアハウスも，松村が言う民家すなわち自宅の開放からはじめられた民営のものである。特徴は，「子どもからお年寄りまで，条件なし，どなたでも。家族が送迎」ということで，1日平均13名（お年寄り5～6名，子ども7～8名）が，スタッフや有償ボランティアの障害を持つ青年等と昼間の生活をともにしている。高齢者には，軽度から中度であるが，認知症と診断されている人が多い。VTRの中でクローズアップされているある高齢者は，住み慣れた土地を離れて息子のところに引き取られており，新しい土地に来て友人もない暮らしであったが，このハウスに来て，乳幼児と関わりその養育に心弾ませるようになって

から，認知症の症状も消え，元気を取り戻した。家族以外の子どもからお年寄りまでの仲間に誕生日を祝ってもらったのは生まれて初めてだと感動する場面が印象に残る。息子にしてみれば年老いた母親をこの施設で見てもらっているという立場から始まるが，実際は彼女によって乳幼児が育てられ，乳幼児の親は自分が働いている間に我が子をこの施設で預かってもらっているという立場からはいるが，実際は，乳幼児もまた高齢者が元気を取り戻す力になっている。

まさに相乗効果なのである。筆者の一人である金田[9]の理論からすると発達過程における主導的活動（乳幼児は遊び高齢者は省察労働）が相互に生かされ響き合っているということになる。

この施設では，乳幼児と高齢者との関わりだけでなく後に触れる世代にわたる異世代や多発達期に亘る異発達等との相互交流に発展する要素を持っている。それは，障害を持つ若い成人も働いていることである。障害の有無にかかわらず彼女の年齢にとっては研修的生産労働が主導的活動になる。この場で彼女は乳幼児がよく遊べるように，高齢者が持っている力を乳幼児の遊び相手の過程で発揮できるように，すなわち，それぞれの主導的活動に専念できるように，それとなくかかわり，障害を持ちつつ働く後輩の面倒をみるなどの仕事を行っている。これはまさに彼女の主導的活動である研修的生産労働に匹敵する活動にあたり，主導的活動が互いに保障され合っていることになる。

こうした異世代異発達の人々の響き合う関係という点で，ここでの視点を，我々の実践にも位置づけていきたいと考え，少し詳しく挙げておいた次第である。

（2）年少児童と年長児童の交流

世代という括りでは，どちらも子ども世代であって同じであるが，発達的には大きく異なり，年少児童とは，相対的に年下の子どものことであり，年長児童とは年上の子どものことである。

本研究では「世代間交流広場」と称しているが，ここでは，同じ子ども世代であっても，発達段階やその主導的活動の異なるもの同士の交流の場合も広義の「世代間交流」に位置づけることにしている。従って，赤ちゃんから幼児前期・後期，小中学生そして高校生（青年期として世代を独立して捉えることもできる），大人も高齢者だけではなく今まさに責任を持って子育てや社会的労働に従事している大人・壮年期の人たちとの交流も対象となる。

近年，保育園や幼稚園等で多く実践されるようになってきた縦割り保育は，園生活における年少児童と年長児童の保育における交流の場の保障であり，広義の異世代交流ということになる。

また，昨近は，以下で述べるカナダの共感教育からのヒントもあって赤ちゃんを教室に迎え入れ，１回や２回ではなく，１年間その成長を追いつつ関わるという学校教育における実践も行われるようになってきている。

地域においても児童館や学童保育，また，青年の集まる今日的な「寺小屋」や「若者塾」等においても赤ちゃんと関わる実践が出てきている。2002年度には厚生労働省がモデル事業として中学・高校生を中心とする「年長児童の赤ちゃんとの出会い・ふれあい・交流モデル事業」が全国５自治体（水沢市・新潟市・杉並区・高浜市・京都市）で行われた[10]。この事業を打ち出すヒントになったのはカナダの「ルーツオブエンパシー」（共感教育）[11]である。この契機は，書物では1990年代の後半に日本に紹介され，2001年に創始者のメアリー・ゴードン氏が来日し，講演会を広く行ったことによる。これは，一組の赤ちゃんと親を赤ちゃんが２，３ヶ月の時から１歳まで，月に１回計９回教室に招き，訓練を受けたインストラクターが決められたテーマに従って子どもたちの学習を促していくものである。一人の赤ちゃんがどのように成長・発達していくか，それを親がどの様に見守り育てているかを観察していき，毎月事前と事後の学習を交えて学んでいくものである。しっかりとしたプログラムであり，講習を受けた

ものしかしてはいけないようになっているが，赤ちゃんのもつ教育力を，教室において，年長児童の共感性や自己の発達過程を見直す教育に取り入れるという点で，換言すれば，世代間交流を授業の内容に位置づけていくという点で，大きなヒントになったものと思われる。

厚生省の上記のモデルの効果については，2003年度にそのアセスメントを文章完成法によって行い，研究として子ども未来財団の助成を得て筆者の一人も参加して行った[12]。その結果，参加生徒（年長児童）にとっても，その親にとっても，実践スタッフにとっても，赤ちゃんの親にとっても肯定的な傾向が大部分であるということがわかった。典型的な回答を見ると，赤ちゃんの親は中高生への否定的なイメージがなくなり子どもの成長した際の姿に接することが出来見通しがもてたと述べ，中高生では赤ちゃんの命と自身の命をともに大切にしたいという思いなどの記述が多く見られ，中高生の親も赤ちゃんとの交流が家庭での話題になり父親も身を乗り出して聞いていたなどと積極的に捉えており，スタッフの場合では，ほとんど女性であったが，参加生徒の熱心さや若い母親の必死な子育ての姿に感動し，やる気を起こしてきたという記述が特徴的であった。

こうしたことから我々の世代間交流広場には乳幼児と高齢者だけでなく，同じ子ども世代であっても異発達を含む人たちを徐々に迎え入れていきたいと考えた。

（3）学校教育・家庭科における世代間交流学習

1）実践の動向

家庭科における保育教育は，普通教育の一環であり，相当学年におけるすべての子どもが対象である。報告者は，その真髄は，『育てられている時代に育てることを学ぶ』[13]ことではないかととらえてきた。そしてそこで育てたい能力は，親になるかならないかにかかわらず，すべての市民に次世代を育てる力，それはさらに先行世代を含めた異世代と関われる力，しかも発展的に関われる力を育てることに汎化されるのではないかと考えてきた。子ども時代にすべての人が履修する家庭科でのこうした保育教育があって初めて，児童福祉法第1条＊の国民の努力義務を果たし得るのではないかと考えられる（＊すべて国民は，児童が心身ともに健やかに生まれ，かつ，育成されるように努めなければならない）。

次世代と関わる力の基礎を育てるために，家庭科では，これまでも多くの努力を積み重ねてきた。もっとも多い実践が幼稚園・保育園を訪問し，子どもたちに触れあい自作の玩具を持って一緒に遊ぶこと等を通すものである。その他に，幼稚園・保育園の幼児を，あるいは乳児を持つ親子を学校へ迎えるもの，公園や地域に出掛けるもの，さらには乳幼児健康診査の際に保健センターでかかわるものなどである。こうした交流が生徒達にどう影響し内面がどう動き，どんな力が育ったのかという評価についても科学的に追究する研究（兵庫教育大学松村京子氏らの研究[14]他）が出てきている。

次なる発展は何か，そういう段階に来ているときに，2001年初頭のM．ゴードン氏の来日が直接間接に家庭科の世界にも影響した。それまでも，赤ちゃん親子を教室に招いた実践はあったが，一人の子どもの発達を授業の進展とともに追跡していき，発達的変化に驚きつつともに喜び，共感し，自分自身の発達過程と重ね合わせ，育てる側の大人にも思いをはせ，先行世代にまで関心をよせるという実践は未だ登場していなかった。課題意識が熟してきていたところへのヒントであったため，M．ゴードン氏のプログラムをヒントに，独自にカリキュラムを創り縦断的発達伴走的な交流の実践が開発されるようになった。報告者の一人である金田らは今日の指導要領では小学校には保育的内容がおかれてないが，異世代と関わる力の育成は小学校から可能ととらえそのことの実証もふまえて実験的授業を行った[15]。

一方，先行世代との関係はどうか。現行の高等学校家庭科教育の指導要領・教科書では，「高齢者の生活と福祉」（高校）というように，乳幼児

と高齢者のみが発達的学びの対象になってきているが，先進的な実践においては乳幼児から学童・青年・壮年期と地域の人々と連携した世代間交流の方向に少しずつ向けられてきている。少なくとも高齢者を単に介護の対象としてのみ捉えるとらえ方は最近の教科書を見る限りにおいては払拭されつつあるといえる。

「家庭総合」で言えば，「人の一生と家族・家庭」につづいて「子どもの発達と保育，福祉」がきて，次に「高齢者の生活と福祉」が別々の単元になっている。そのため，自分を中心に乳幼児との関わりと，高齢者との関わりというように分けて捉え，一連のつながりと各世代間の交流に視点が向きにくい構造になっているが，読みようによっては，はじめに人の一生が来ているのでそこで繋ぐことによって世代間交流の視点が入りやすくなっているとも考えられる。家庭科は家庭内のことではなく家庭からむしろ外とつながる世界を学ぶ必要があるという点からすると人の一生を家族・家庭に限定しているように捉えられてしまうと狭くなっていくきらいがあるが，先にも述べたように徐々に世代間交流の視点に基づく実践も試みられてきている。

2）世代間（異世代・異発達）交流の理論と実践

── 大学院生の研究「高等学校における遊びを媒介にした世代間・異発達交流実践」から ──

筆者の一人（金田）はすでに1990年のはじめに世代間交流の重要性を主張していたが，これは，その点に興味を持った大学院生が修士論文の一部として行った研究[16]である。実践としては，高等学校の福祉コースにおける家庭科の授業の一環としてとりくんだ世代間交流の効果を見る授業であり，大学（研究室）と共同で実施したものである。

具体的には，各世代が自身の役割を持って世代間で遊ぶという取り組みであり，生涯発達における主導的活動で交差することを目指して行った実験的実践である。ここで，主導的活動についてみると，幼児は「遊び」，高校生は「学び」，高齢者は遊びを伝えるという「省察労働」を，大学院生は研究という「研修的生産労働」を，高校教員は教育労働，大学の教員は研究・教育労働という「創造的生産的労働」を行うということになる。高校生がはじめ高齢者の若いときの話を聞き，次に子ども時代の遊びを学び，さらに保育園に高齢者と高校生が同時に出かけて行き三者で遊ぶというものであるが，遊びを媒介に子ども期（園児），青年期（高校生），壮年前期（大学院生）・壮年後期（教員，研究者），老年期（高齢者）のまさに5発達期4世代のそれぞれの主導的活動が一致し，どの世代・どの発達期にとってもそれぞれの人格形成に有効であった。

ここで，注目したいのは，高齢者を世話の対象としてではなく，むしろ高齢者から彼・彼女たちの生きてきた時代を学び，子どもの頃の遊びを伝承してもらいつつ，ともに遊ぶという，尊敬しつつ関わる存在として出会っている点である。

2．大学における「子育て広場」的実践の実態

この点についても全国的なアンケート調査などが必要になるが，それについても次年度の課題とし，ここではインターネットで捉えられる範囲で，今日の大学における実態の概観をつかんでみた。結果は以下の表の通りである。

ここから見るとかなり多くの大学が，子育て支援に関わる「子育て支援センター」（ないしは「子育て広場」等呼び名は様々であるが）をもっており，大学のもつ専門性をもとに地域貢献をしていこうとしていることがわかる。

学生の教育と結合することについても，どの大学も，方法は異なるがみな意識している。単位を出して授業に組み込んでいるところ，授業実習（参加観察）として認めているところ，学生ボランティアとして位置づけているところ等様々である。ゼミとして位置づけているところは本学だけのようである。学生の参加を主なねらいにしているところと地域貢献が主のところとがあるがいず

れにせよ教育と研究と地域貢献を結合しようという意気込みが感じられる。

ここでの実践のように，世代間交流をねらっているものについてみると，信州大学は，まさに世代間交流を意図しているが，高齢者と留学生の交流が主で，子ども世代は対象外になっている。また，神戸大学の「のびやかスペース」は，「子育て支援をきっかけにした共生の街づくりをめざす施設です」とのべて，神戸市と神戸大学が協定を結んで共同で実践的研究と地域貢献の場を設立することに合意し，すすめてきたものです」とあり，灘区の旧区役所跡地に神戸市と神戸大学がそれぞれ予算立てし，かつ各種補助金と委託金によって施設を建てる計画で2005年夏オープンを目指しているという。ここでは，高齢者や障害者が自然に加われるようになっており，我々の世代間交流広場と大きな目的は一致しているように捉えられる。しかし，研究を共同で進める過程で院生などは参加できるであろうが日常的な学生の参加は計画されていない。これは，子育て支援にホスピタリティと暖かい空間を，そして乳幼児から高齢者まで障害のあるなし，性別，国，門地に関わらず属性だけで排除することのない関係，来場者が互いに関心を持って関われて，誰にとっても「空間」・「人間関係」・「役割」の面からの居場所になるようにと願ったスペースづくりである。そして，そのことから，人間性を失いつつある現代社会に抵抗し一人ひとりの人間としての輝きを取り戻すコミュニティづくりを目指している。理念は我々のめざすところとまさに共通しており，広い意味での世代間交流の視点が入っていて注目に値する。本学の場合には，コミュニティづくりを大学の中での広場活動を通して学生の研修・実習・授業・ゼミなどとつなぎ，学生のコミュニティづくりへの力量向上に資していこうという点にある。また，福岡県立大学では筑豊地域の実態に即して行政とタイアップしてきめ細かな取り組みをすすめている。子育て支援システム自体を研究課題としている子育て支援研究が主であり，世代間交流と相互発達という視点はおかれてはいない。

従って，大学における教育活動と結合した広場実践として世代間交流を推進しているのは本学の子育て広場の特徴といえることがわかる。そして，ここから導き出された原則は，これから地域づくりに取り組むところへの参考に資することが可能になるものと期待できる。特に小平市は世代間交流事業に早くから取り組んでおり，市のそうした自治体づくりと呼応していく点は神戸大学と神戸市との提携から学ぶことが出来るものと思われる。世代間交流のソフト面においては，神戸大学もまだこれからの状況であるので，ここでの成果も地域コミュニティづくりをめざした世代間相互発達の先行事例として一つの参考となるものと思われる。また，学生の教育の上では，広場に参加することが単に保育の力量を育てるだけでなく，学生自身が地域の発展の方向を見通し，地域の世代を超えた間接的な支援力を付けていく上で展望が開かれてくる。

3．先行研究から本研究への発展

以上のような先行研究の上に立ち，出来ることなら高齢者と乳幼児のみの交流ではなく，多くの世代が，互いの主導的活動を響き合わせて相乗効果を生み出すような，そしてその過程でそれぞれ必要とされることを実感しあえるような，「世代間交流広場」を作っていきたいと考えた。

これまではその相互の関係を実験的に高校の授業を通して検証してきたが，子育て広場の一環として，地域と大学が結合して取り組む日常的な場において実践・検証していき，やがてはそれが地域づくりに発展していける方向へと繋げていきたいと考えた。

そして，それが授業と結合するとき生きた学ぶ力となっていくものと期待できる。

もちろん，はじめから，全世代が同じレベルで参加できないのではないかと思われるので，まず学生と高齢者の話し合いからはじめ，徐々に広げる方向をとることにした。

大学の子育て支援，子育て広場の状況

～世代間交流広場の取り組み～

大学名	開始年	活動グループ	参加呼びかけ対象	参加対象範囲	活動内容	活動回数	参加費	担当教員の配置	学生の参加形態
白梅学園短大大学	2004年6月	「世代間交流広場」,「あそぼうかい」,「オレンジペコ」, NPO法人「きらら」,「障害児のグループ」,「学習交流会」	乳幼児，保護者，小学生，高校生、大学生、卒業生，高齢クラブ，ケアハウス，地域の方	乳児から高齢者まで，障害児を含む	学生の主体的運営，学生の手作りおもちゃ，伝承遊び，工作，紙芝居，あそび，交流会，地域の小学校との連携など	グループによって異なる。年に3回から毎月1回	無料	グループごとに担当の教員を数名配置。学生の実際の指導は主に実践教育指導員が担当。広場当日は保健婦が待機	ゼミ単位でテーマを持っての参加と自由参加の2種類。短大の保育科，福祉援助学科，心理学科，教養科，子ども学部の全学科の学生
東京学芸大学生活科学学科	2002年11月児童学プロジェクトの研究で	小金井子育て交流会「す～ぷ」,「び～の」（大学教員のサポートグループ）	学生、子育て支援関係者，子育て中の親	乳幼児の親子，妊娠中の夫婦	子育ちや子育ての交流，わんぱく夏祭り，夫婦子育てサロン，メーリングリストで情報交換，ネットワークづくり	奇数月隔月第2水曜日	1名100円（大人も子どもも同一）	各グループに東京学芸大学子育て支援研究会の教員などを配置，保育士も待機	自由参加
東京家政学院大学	1987年	幼児グループ	2歳児，3歳児の子どもと親（人数を限定），学生，教員，センターのスタッフなど	幼児の親子	育つ・育てる・育ちあう活動	1年間を単位として約24回	グループ保険と教材費	専任教員，補助員，大学院生，幼児体育特別講師，リトミック特別講師	保育や心理、教育の学生（授業としての実習），参加観察
東横学園女子短期大学	2004年6月	子育て支援センター・「ぴっぴ」	乳幼児と親（2005年4月大人889人，子ども953人の合計1842人が利用）	乳幼児の親子	保護者と子どもそれぞれのキッチンスペースで交流	月曜～土曜	1回100円	短大の心理学，保育学の専門スタッフ，専門の保育士	保育学を学ぶ学生のボランティア
千葉明徳短期大学	1998年	子育て支援センター・親子教室，個別相談，おしゃべりタイム	親子，学生，専任教員（ケースワーク，発達相談など），保育スタッフ	乳幼児の親子	親子あそび，子育て支援スタッフの養成講座，子育て支援研究のネットワークづくり	週1回	入室時3000円，1回1000円	短大教員，保育スタッフ，小児科医	子育て支援の学習の場，1999年度より保育方法研究の授業として半期2単位。
神戸大学ヒューマン・コミュニティ創生研究センター・サテライト施設	2005年8月開設予定，準備委員会は1月より活動中	親と子のくつろぎ空間ーふらっと（2004年から準備期間として実施），「のびやかスペースあーち」	子育て中の親子。開設後は，乳幼児，親，お年寄り，障害者など	乳児から高齢者まで，障害児を含む（予定）	乳幼児を中心としたあそび場，造形活動，相談，情報コーナーなど	毎週火曜日	不明（大学と神戸市で運営の予算を計上）	発達科学部教員	未定
福岡県立大学生涯福祉研究センター	2001年	おもちゃとしょかん・たがわ，（お父さん・お母さんの学習室（親訓練，2005年4月より開校）	発達に障害がある子どもとその家族。子ども会，育児サークル，児童関係諸機関，学生（事業を支えている）	乳幼児の親子，発達が気になる親子	障害児用のおもちゃの製作と収集，子どもの遊び相手，おもちゃづくり	毎月第1，3水曜日，第3土曜日	無料	田川児童相談所，田川福祉事務所，田川市社会福祉協議会，田川工業高校などの各機関が協力	学内一のサークルOTTっと（おっとっと），主な運営者
信州大学教育実践総合センター	1998年	世代間交流プロジェクト研究会，YOU遊サタデー	一般市民，外国人，子ども，学生，留学生，教員	外国の人，留学生	世界の歌，ワークショップ，着付け教室，ポットラックパーティー，フォークダンス，ミニ英会話	研究会を毎月1回	不明	教育学部生活講座教員	学生が中心になっての企画

Ⅲ　実践の展開（方法と結果）

1．本学の教育・福祉研究センター「子育て広場」における世代間交流広場の位置づけ

「教育・福祉研究センター」が中心となり，地域との連携を大きな目的とし，子育て支援もその柱に据え，ゼミナールやカリキュラムの見直し，保育科・教養科・心理学科・福祉援助学科が互いに刺激し合いつつ，地域に根ざした子育て広場の充実を，事業の他の企画と連携させつつ平成７年からの助走の上に，昨年度は，いくつかの困難を越えて「子育て広場」を実践してきた。

具体的には，新しく立ち上げたもの，以前からあるものを生かしたものを結合し，次のｉ～viまでの６広場に体系化した。

軸Ⅰ（本学独自の取り組みか，附属幼稚園・NPOなどすでに行ってきている関連機関の取り組みか），軸Ⅱ（誰でも参加できるオープン広場か，登録者と学生教員が１年単位で固定される広場か），という軸の二つのクロスからなっている。実際は「関連機関で固定」というタイプはないので，３つ（①～③）の独自性があり，さらにその中が特徴を持つ二つからなっており，計６種類である。

① 本学独自・オープン：
ｉ「あそぼう会」・ii「世代間交流広場」
② 本学独自・１年固定
iii「オレンジペコー」・iv「気になる子の広場」
③ 関連機関・オープン：
v「子育て広場ＮＰＯきらら」・vi「白梅幼稚園ひよこの会」

この中で，「世代間交流広場」は，大学独自の開催でオープンスタイルになっている。

これら６種の今後の課題は，①オープン広場に参加した親子のそれぞれの要求に，一定期間固定のグループと適宜にどう関連させていくか，また，②関連機関にも参加している親子とどう関わっていくか，そして③レギュラーになってきた参加者には「当事者主権」として運営にどう参加して行く道を切り開いていくか，さらに④センターに位置付いている専門性を生かした地域に貢献できるシステムである二つの事業（「特別支援教育」と「発達相談室」）とどう結合していくかが問題となってくる。

これらは，本学園広場全体の課題となるが，こうした取り組みを本学の教育にのみならず小平市の教育・保育と結合していき地域づくりに発展させていく際に，子どもの生涯を見通す上で世代間交流広場の出番があるように思われるが，具体的方法の探究は今後の課題としたい。

2．実践の経過

（1）第Ⅰ期；予備的実践期

白梅幼稚園の園庭開放の日に学生教職員が参加し，学生と教員による広場の実施の先駆けを作り，実践を振り返り今後の方向を作る（４回）

Ⅰ期は，白梅幼稚園の園庭開放の日に訪れた親子を対象に試行錯誤の中で実施した。準備は不十分だったが，夏場でもあり，男子学生が中心になって水あそびやスイカ割を実施し，男女学生が前もって練習した紙芝居や手あそび歌で広場を締めくくった。

６月16日　第１回子育て広場開催：幼稚園
６月30日　第２回子育て広場開催：幼稚園
７月３日　第３回子育て広場開催：幼稚園
７月７日　第４回子育て広場開催：幼稚園

（2）第Ⅱ期；「世代間交流広場」と「あそぼうかい」への分化とそれぞれの取り組みの状況

Ａ：世代間交流広場の取り組み

保育科の金田ゼミが中心になりながら，福祉援助学科の参加も呼びかけた「子育て広場」で，「広場」自体の回数は少ないが，準備のプロセスを重要な学習の場と位置づけてきた。すなわち，学生が地域に出かけて行き，高齢クラブの方々と関わったり，保育園に敬老の日の集いの見学へ出かけたり，地域の高齢クラブ企画の芸術祭に参加したり，高齢クラブを訪問したり，また，小学校の世代間交流に実際に参加したり，学生自身が自

らの手足を使って活動することを通して自分たちの子育て広場のイメージづくりをしていった。以下にその具体的経過を掲載する。

＜第1回世代間交流広場までの事前活動―地域における高齢者と乳幼児の交流に関する事前調査＞

7月30日　敬老の日の幼稚園・保育園での取り組みについてのアンケート調査打ち合わせ（教員と金田ゼミ学生）

8月11日　小平市福祉協議会の海上会長から，世代間交流の実情についての聞き取り（教員3名が参加）

8月31日　小平市高齢クラブ代表に世代間交流の広場への協力を依頼（教員3名）

9月9日　敬老の日の取り組みの調査結果を世代間交流の広場の学生で検討，見学園を決定　（金田ゼミの学生11人）

9月16日　小平市の私立こぶし保育園の祖父母との集いに参加（金田ゼミの学生13人と教員2名）

＜第1回世代間交流広場の開催＞

9月25日　第1回世代間交流の広場開催:I棟23教室（金田ゼミの学生14人，教職員5人，高齢クラブから7名が参加して，今後の方向について打ち合わせた。）（写真P.14参照）

＜第2回広場までの準備としての地域活動＞

10月22日　小平市立家庭支援センター訪問（学生と教員で子育て支援の状況の資料収集）

10月25日　小平市立第6小学校「ふれあいマンデー」に参加　（学生3人，教員1人）

10月28日　高齢クラブ連合会作品展示会に参加（金田ゼミ14人）

＜第2回世代間交流広場の開催＞

10月30日　第2回世代間交流の広場開催:G棟（白梅祭に合わせて多世代参加をねらう）

＜第3回までの活動―地域関連機関との積極的交流＞

1月31日　小平市立第6小学校「ふれあいマンデー」に参加　（学生8人と教員1人が参加）

3月10日　高齢クラブ連合会・演芸会に参加（金田ゼミ3人）

B：あそぼうかいの取り組み（参考資料＝次に合流する関連広場の状況）

「あそぼうかい」には，心理学科と保育科の学生が関わった。乳児と幼児のパートに分かれ，各々の担当教員とともに，子どもの発達と親の要求をすくいあげながら，あそびの内容をいろいろな視点から話し合って計画した。作業に当たっては，空き時間を利用し，広場開催2週間前からは毎日，担当教員とともに準備をした。

10月16日　第1回あそぼうかい開催:小体育館

11月20日　第2回あそぼうかい開催:G棟

12月18日　第3回あそぼうかい開催:幼稚園

（3）第Ⅲ期；白梅「合同」子育て広場

前回は白梅祭（学園祭）の日程の中に組み入れて世代間交流の広場を持ったため，多世代の人々が集まったが，全く単独では，高齢者の方々は参加しても乳幼児等他の世代が集まるかどうかわからないという危惧や，二つの広場に参加する学生が分散するので，スタッフの数が少なくなるなどの問題もあり，考察は双方が別々にするとしても，第Ⅲ期は「世代間交流の広場」と「あそぼうかい」が一緒に広場を持つことにした。それをもって「合同」広場と称することにした。

合同広場には，保育科，教養科，心理学科，福祉援助学科，の4学科全ての学生が関わった。ゼミ数でいうと計17ゼミの学生が参加し，教員の参加も9名と広がった。高齢者も高齢クラブとNPO法人「いきがいサロンオリーブ」（デイサービス）の参加もあって17名に増えた。前回よりさらに学科をこえゼミをこえて多くの学生が参加してくるようになってきた。

＜第３回広場に向けての準備活動＞

12月10日　第１回合同広場実行委員会（学生10人，教員６人参加）

１月11日　第２回合同広場実行委員会開催（学生11人，教員６人参加）

２月17日　第３回合同広場実行委員会（学生９人，教員６人参加）

２月21日　NPO法人「いきがいサロンオリーブ」へ合同広場の参加協力を依頼（学生１人，教員１人）

２月21日　高齢クラブの代表宅を訪問（内容打ち合わせ，学生６人，教員１人）

２月28日　小平市立第６小学校「ふれあいマンデー」に参加（学生９人と教員３名が参加）

３月７日　合同広場での歌を音楽の教員（秋山）が指導（学生９人，教員４人参加）

＜第３回世代間交流広場の開催＞

３月12日　白梅合同広場開催:Ｉ棟13教室およびＧ棟３教室（子ども55人，保護者39人，シニア17人，学生40人，教職員11人　計162人）

以上のように「世代間交流広場」の実施は2004年度においては３回である。

第Ｉ期は世代間交流広場以前の大学独自に地域の子どもを受け入れる試行錯誤期であった。

第Ⅱ期からが実際の世代間交流広場（略称「広場」）の開催に移行する。

この期に２回「世代間交流の広場」を独自に開催した。

第Ⅲ期「あそぼうかい」との合同広場に発展した時期を第Ⅲ期とした。

３．広場の実践の実際と参加各層の様子

（１）第１回の世代間交流広場の開催模様とその成果

参加者は，高齢クラブから７人，学生１４人，教職員５人（教員３人，職員２人）であった。

ここでは，まず小平市高齢クラブの方々と金田ゼミの学生がおむすびと世代を超えて味わえるお惣菜をそろえて（高齢クラブの方のリクエストは「おいしいお新香がほしい」であった）会食をしながら話し合いを行った。

話し合いの内容はつぎのようであった。学生からは，①シニアの方々と交流したいと考えるようになった意図についての伝えと，②今日の子育てのストレスの背景をどう思われるかという問いであった。自己紹介のなかで，それぞれ，戦争体験についておよび，子ども時代のおやつ（手作りの心太）のこと，お盆など日本のどの地域にも受け継がれている伝統「行事」を何故大切にしているかなどの話に耳を傾けていた。三つのグループに分かれて行われ，グループ間で話の発展具合は様々であったが，それぞれに充実した１時間半であったといえる。

学生たちの感想を見ると，１時間半を共にしただけであるにもかかわらず，究めて豊かな感想が出ている。詳しい分析は次回の課題にし，今回は，２，３挙げておくにとどめる。

「年齢を聞いて驚くくらい元気だった。」「耳の遠い方と関わるときには大きな声を出すのが意外と大変であった。」「孫の話をするとき表情が軟らかくなる。」「昔の行事について詳しく，地域によって異なること，」「昔ながらの風習やあそびが海のそばか山の近くに住んでいたかで異なることが印象に残った」等々。

そして，その後ゼミでの学習もふまえて，後の学生間の話し合いで何故世代間交流なのかについて語り合い，以下のような白梅際参加の展示が出来たことからも学びの成果がわかる。

参考資料　世代間交流広場の展示から

学んだこと

〈五世代共生〉

「　みなさん，今日本には100歳以上の人が何人いると思いますか。なんと，２万人以上もいるんです！！ひいおじいちゃん，ひいおばあちゃんまでもが元気に暮らしています。

私たちはそんな人生の大先輩とともに五世代が共生している社会で生きているんです。」

〈赤ちゃんが「先輩」？〉

「『先輩』と聞くと自分より年上の人や経験がある人を思い浮かべますが，見方を変えると赤ちゃんも私たちの先輩になるんです。というのは，今生まれたばかりの赤ちゃんは，私たちをこえて未来をつくる役割を持っているからです。最も人類の先端にいるんです。」

〈知ってた？実は〉

「みなさん，シニアの方々がやりたいことは何だと思いますか？ゲートボール？散歩？太極拳？孫と遊ぶこと？いいえ，そうではないんですよ．本当は，皆に頼られたいと思っているんです。それぞれの世代がお互いに必要とされることがあり，五世代が共に協力しあって，未来をつくっているんです。

自分には何ができるか考えてみてください。」

学生の考え

〈世代間交流の必要性とは？〉

- それぞれの世代が他の世代に様々なことを伝えていくことで，自分の経験が自信になり，生きがいを感じられる。
- 人はみな，高齢者もしかり，必要とされていることを望んでいるようなので，異世代と交流する中で生き生きとしてくるかもしれない。
- 関わることで色々話している中に，安心感や安らぎが生まれる場合もある。
- お年寄りの方々と接することで，昔の遊びや育児がすべてよいわけではないし，悪いわけではないと思うが，昔の遊びや育児を取り入れることによって，さらに視野が広がり，よりいっそう良いものになると思う。
- 一緒に遊ぶ中で，倫理観，道徳観などを教えられたと思った。
- 核家族化へ進んでいく社会の流れを逆行させることはできないが，異世代間で交流することで新しい形の地域コミュニティの創造に繋がると思う。
- 現代日本の社会問題（少年犯罪，治安悪化，子ども虐待など）のあらゆるものの背景となっている希薄な地域コミュニティを世代間交流を通して密なものへ変えていくべきだと思う。

〈保育現場に出た際どのような交流をしたいですか〉

- 昔の遊びなどを教えてもらうような企画をする。
- 「ふれあいマンデー」（小平六小で実施している月曜毎の世代間交流）のように部屋を開放し，あそびを通して地域の人々と交流する。
- 「このゆびとまれ」の様に乳幼児，その親，その祖父母，地域の障害者，高齢者が集える場を作りたい。
- 老人ホームにも行ってみたい。
- 休日に園庭開放をして，交流の場にする。

第１回世代間交流広場の様子

（２）第２回の世代間交流広場の展開

10月30日　白梅祭（学園祭）の中に組み込む。午後１時～３時　Ｇ棟の一室使用

参加予定者は高齢クラブと金田ゼミ生以外は白梅祭に参加したシニアや親子など。

結果参加者は，学生15人，子ども（乳幼児・学童）26人，保護者（含む祖父母）14人，シニア６人（高齢クラブ４人・その他２人），高校生５人，他大学の学生（男子青年）３人

１）ねらい

伝承的遊びやシニアに学べる遊びのコーナーを用意し，相互に交流できる場を作り交流の楽しさを体験できるようにし，その相互学習の効果を見る。

また，これまで世代間交流について学んだ成果

を展示し，参加者との交流の契機にする。

2）方法

コーナーづくりの案を立てそれぞれにシニアと前もって相談しておき，学生スタッフも，担当するコーナーを決めておく。

緻密なカリキュラムを作成するというよりは，こうした活動には参加者と共に創るという点に視点を重視した。しかし，緩やかなカリキュラムは必要と思われるので，それを考案していくまでの手がかりとし，コーナーを作った。そして，各コーナーに担当者をおき，そこにこられた参加者同士が相互に交流しつつ遊びが発展するよう適宜配慮していくという方法を採った。

＜作ったコーナー＞

①竹細工－ⅰ　竹トンボづくり（指導シニア男性）

②竹細工－ⅱ　水鉄砲づくり　（　　同上　　）

③紙細工－チョウチョづくり（指導・シニア女性）

④お手玉（指導シニア他）

⑤絵本コーナー（子どもから離れて母たちがくつろげるコーナーを兼ねる）

⑥学生がこれまでに活動して研究したことを発表する展示コーナーを作る

ⅰ　世代間交流の意義

ⅱ　小平市の子育て支援状況マップづくり等

ⅲ　敬老の日に因む保育園行事への参加報告

3）結果（広場の状況）

図-1のようにコーナーを配置し，入れ替わりはあったが常時図のような参加状況であった。

竹細工は，学生自身がシニアから作り方を学びそれを子どもに伝授する場面もあり，学生自身が作れたことを喜んでおり，学生とシニア両方から学んだ子どもたちも，水鉄砲や竹トンボもつくって遊ぶまでに発展し，水鉄砲遊びにも興じていた。

紙細工のチョウチョづくりはシニアの女性が教えていたが，高校生が立ち寄って作っていったり，他大学の大学生も立ち寄って参加し楽しんでいた。

お手玉コーナーは，比較的シニアの教員なども含めてシニアが入っている場合は昔からの遊び方を伝授してもらうこともあったが，学生と子どもだけ（幼児・学童）の場合は，輪になってお手玉を回して誰が一番長く続けられるか他，様々な遊びを産み出して楽しんでおり，人気のあるコーナーになっていた。

絵本コーナーは，周りを少し囲って他と区切りをつけ，授乳も含めた休めるコーナーと兼ねたところ，乳児と母親とか，子どもが他のコーナーで遊んでいるときの母たちの話し合いコーナーになり，ここもまたよく活用されていた。

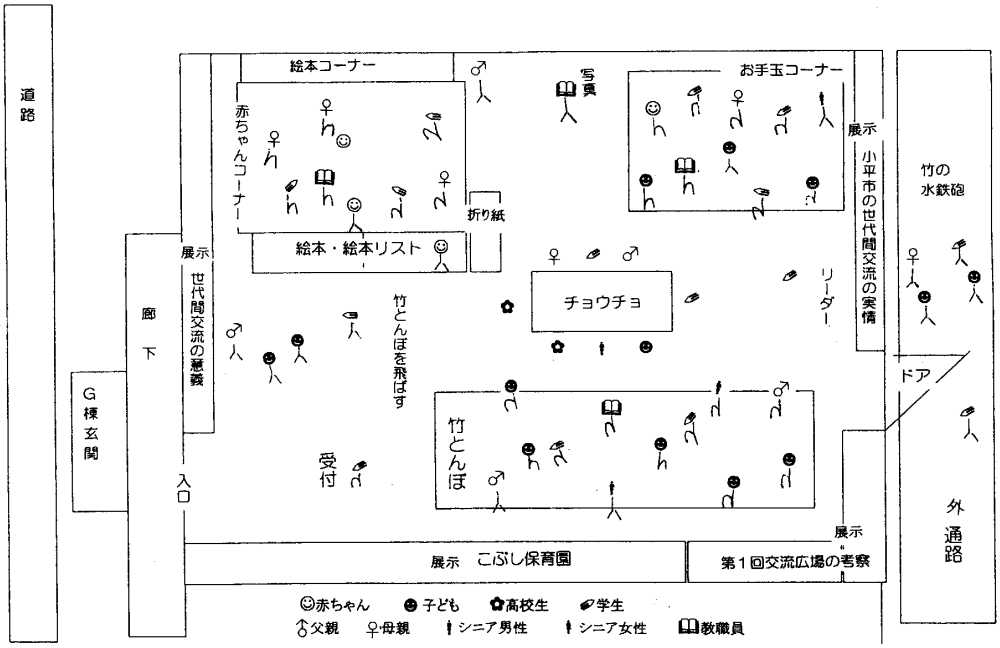
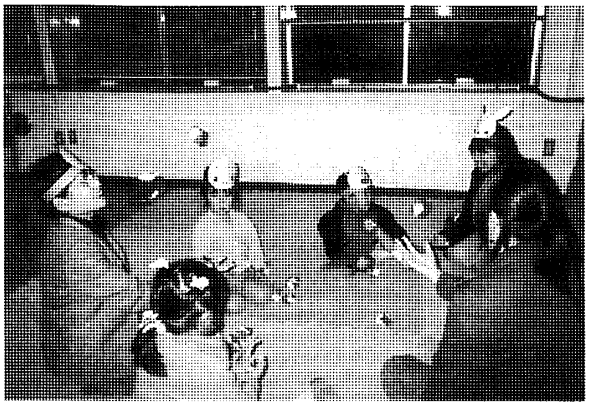


図1 世代間交流の広場見取り図　G棟



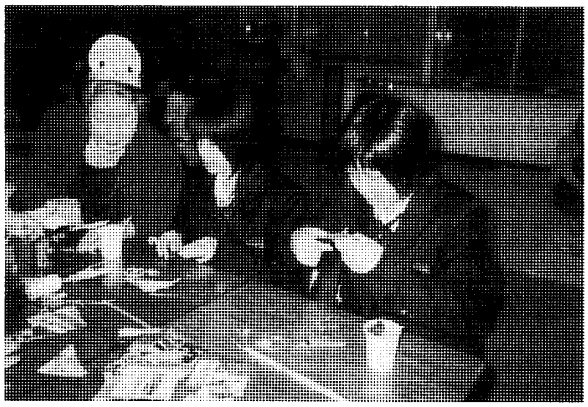
子どもと学生にお手玉を教えるシニア(教員)

幼児も竹とんぼづくり

シニアと竹とんぼづくり

絵本コーナーの親子

竹とんぼづくり



高校生もチョウチョづくり

展示コーナーは，かなりの人が立ち寄って読んでいた。感想の中にもよく学んでいると書いている参加者がいた。

4）成果

－参加者の世代間交流の視点からの感想から－

学生の感想と参加者からの感想を参考として挙げておく。今回の実践から世代間交流の効果の点できちんとアセスメントをすることを今後の課題とし，今回は，かなりの手応えがあったということについてのみ，まとめておくにとどめたい。

①学生の感想

感動したこと

- 赤ちゃんを抱かせてもらい，とても嬉しい。
- ひとつのあそびでもいろいろなあそび方があって面白い。
- 年配の人はいろいろなあそびを知っている。
- 予想以上の参加者に感動した。
- 楽しそうに竹とんぼや水鉄砲を作っている子どもたちの姿に感動した。
- 名札の冠を嬉しそうにかぶってくれた。
- 普段からたくさんのものに触れている子どもは，適応が早い。
- 小学生や幼児が竹を切ることも自分でやろうとする。
- 小さい子どもでも上手にのこぎりなどを使える子どもがいた。
- 自分が頑張ればがんばるだけみんなも頑張ってくれてすごく嬉しかった。
- 小平市の世代間交流について，実際に足を運んで現場を見学させてもらったり，話を聞けたりしたことが，広場の充実につながった。地域の交流も見えてきた。達成感がある。
- 世代間交流のよさを存分に味合うことができた2日間だった。

気がついたこと

- 竹とんぼが一番人気だった。
- 竹とんぼは大人気だったが準備の大変さが難点。
- 赤ちゃんコーナーは，ちょっとほっとする場所としても役立っている。
- シニアの方がいることで，学生だけよりも親も参加しやすい。
- チラシを持って呼び込みをしたときに，シニアの方が教えてくれますといったら，興味を持った人が多かった。
- 赤ちゃん連れのおかあさんと学生のコミュニケーションが少なかった。
- 子どもたちだけでなく，親やシニアの方々楽しそうに参加されていた。
- 1回目よりもシニアの方々と話をすることができた。
- 小さい子どもに接するシニアの方は，とてもやわらかい表情をしていてよかった。
- 折り紙を教えるのは大変。
- シニアの方はしっかりしていても身体がシニアであることを常に頭に入れておかねばならないと思う。今回のこと（準備過程での転倒事故）をしっかりと反省し，今後へつなげていきたい。
- 大学が主催する交流の場には，普段，シニアや子どもたちのいる環境ではないので，その包容力というか，コミュニケーションをとる場として，どれだけ高めていけるか課題だと思う。
- 長期的に交流することを考えていくことが大切だと思う。
- お母さんたちのおしゃべりの中にシニアの方が入っていたらもっと良かった。
- 係りを決めたので動きやすかった。

②一般参加者の感想（原文のまま）

- 竹とんぼづくりが楽しかった。20代
- 竹とんぼの作り方がよく分かった。10代
- 竹の切り方や仕組みについて知ることができた。20代
- 様々な年代と交流してみたい。10代
- 親子4人で参加しました。お手玉や竹とんぼがとても楽しかったです。40代
- 幅広い年齢の方と一緒にいろいろと学びたいです。高校生
- チョウチョづくりが楽しかったです。高校生
- みんながそれぞれ出来ることをやれればいいのかなあと思いました。30代
- 子どもや老人の気持ちがよく分かった。率直に交流していたので感動し，驚いた。60代

（4）第3回「世代間交流の広場」

1）ねらい

乳幼児中心の「あそおぼうかい」と合同で行うことにより，乳幼児とシニアの交流の機会をつくり，発展の契機とすることを主なねらいとした。

2）方法

子どもの遊びのコーナーとシニアとの交流するコーナーも作った。すなわち，「乳児や小さい子ども向けの遊びコーナー（簡単な工作，パッチンボード，おもちゃなど)」と「幼児，小学生向けの遊びコーナー（魚つり，自分で作ったり，体を動かしたりしてみよう)」「伝承あそびコーナー（こま，おはじき，囲碁，将棋，あやとり，お手玉づくり)」「パネルシアター」「おばあちゃんおじいちゃんの知恵袋（子育ての知恵など気軽に話し合いましょう)」である。コーナーが「乳児向」としてあっても世代間交流広場が合同であるからむしろ乳児のコーナーでシニアが赤ちゃんと遊べるようにということも意図した。

2回目と同様緻密なカリキュラムを組むことはせず，コーナーに担当がつき，関わりが自然に進み，発展するよう，配慮するという方式をとった。

3）結果（広場の状況）

それぞれのコーナーにおいて相互交流が観察された。この交流の観察記録からの分析については現在整理途中のため，今後詳細にそのプロセスを解析していくことにする。

その他の模様としては，様々な階層の人々が自由に参加できるようにしてあるため，大学教員自身が独楽回しに興じて世代間の中に一員として加わる姿も見られた。

また，地域のNPO法人「いきがいサロンオリーブ」からは自身の「立体切り絵」の技術を役立ててもらえたらと自ら材料を用意して下さる方も出た。こうした自発的な参加を次回には意識的に取り入れるという展開で進め緩やかなカリキュラムづくりの手がかりとしていきたい。

かなりたくさんの人数が集まり，先に経過の項で内訳を書いたが子ども55人,保護者39人，シニア17人，学生40人,教職員11人で，総勢162人に上った。

4）参加者各層におけるアンケートおよび事後の感想に見る成果

①参加学生の場合

「授業との関係や子ども理解の深まり」では，「心理学で学んだ発達段階ということが納得でき驚きの連続であった」,「子どものことを学んでいるつもりでも，子どもと関わることには不安があった。子どもとあそんだりあそびを考えたりすることが関わることで楽しくなった」,「体の接触によってコミュニケーションをとる方法があるが，それが子どもにとって有効であるとわかっていても，人の体に触れることにためらいを感じ，遠慮でもしているかのような自分に，また，相手が子どもとはいえ，人にかける優しい言葉がなかなか浮かんでこない自分に気がつくことができた。気がつくと，次の目標がはっきりしてきて頑張ってみようと思えた」，等々であるが，こうした感想は，授業を発展させる上に大きな成果であったといえる。その他,「親の子育ての悩み」についても，実態がわかり理解が深まったというものも多くあったが紙幅の都合上省略する。

「運営してみての感想」でも一つのことに取り組むことは，どれほどエネルギーがいるか，しかしそのことが力になるという実感が寄せられていた。

シニアの方との交流の感想では，お手玉を途中まで縫っておいてその場で完成するコーナーでは，学生がシニアに縫い方を教わり注意されながらの場面もあり，そういう作業をしながらの話し合いを楽しんだというものもあった。

②参加保護者の場合

保護者は39人のうち，母親がほとんどで，父親は3名であった。

アンケート調査から

子どもが楽しそうに遊んでいたと非常に強く感じており，大人も楽しめたと思っている。7割以上の保護者がいろいろな遊びを体験したりいろいろな人と触れ合えたりでき，ホッとできたと感じている。シニアと遊んだことについても，おおむ

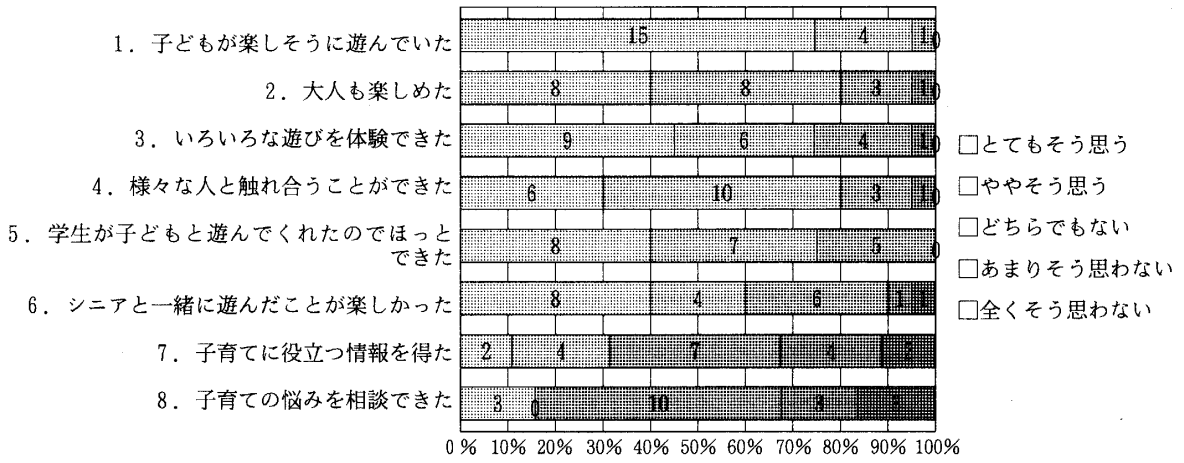


図2　白梅子育て広場の感想（N＝20）
佐久間路子（「広場」参加教員）作成

ね肯定的であった。

ただし，子育ての悩みを相談できたかというとそう思う人が少なかった。ここに今後の課題が見られた。(図-2 参照)

③参加シニアの場合

女性の方の話「団塊の世代の子どもが今の親世代のようだが，私たちに無関心というか，どう声を掛けてよいかわからないように思えた。学生さん達は私たちの取り組み（美術展や演芸会）に参加してくれたり家を訪ねてくれたりしているので気心がわかってきた。そういうつながりからだんだんにうち解けられると思う。」

男性の方の話「学生達がよくやっていて好感が持てた。ベーゴマなどは自分たちの時のものと材料が違うようだ。」

このことから，学生とシニアの関係は，かなりの関わりを持つ中で，交流がもてるようになったが，子どもの親たちとは隔たりがあることがわかったが，それだけに交流を意識的にもつ必要があるということが確認できた。

Ⅳ　総括

以上の取り組みからテーマに即して考察する。

大学での世代間交流広場づくりが，地域における子育て支援と世代間の相互発達にどうつながったかという点についてである。はじめに参加者階層における全体的に見た場合の成果と課題について捉え，地域への発展の兆しの状況を捉える。そして最後にここでの課題について考察する。

1．参加者各層の状況に見る成果と課題

総じて見て参加教員として事後の学生との会話などから総合的に見て次のような点が育ったのではないかとも思われる。

①普段ならほとんど話したことのない高齢者層の人たちと，はじめはスムーズには行かなかったが，自然に関われるようになった。

②お互いの文化の交流をすすめ，高齢クラブの方々の文化祭にも出かけ，学園祭にも出向いて頂くというような交流が出来るようになった。

③地域に出かけようとする学生が多くなり，小平市高齢クラブの役員のお宅に伺って下相談をしてきたり，地域の NPO 法人高齢者デイサービス機関を見つけて自ら誘いに出かけたりと，学生の組織力が身に付いてきた。

④高齢者観の変革が見られた。高齢者は何も出来なくなってしまう人ではなく，むしろ意欲的にいろいろなことを行い，何でもよく知っていて思慮深く出来る力もある人であること，

そして知っていることを伝授することや人の役に立つことを行なったり，若い人と交流することを喜んでいるということ，しかし，油断をすると，やはり体のバランスが悪くなっておられることもあり，転倒やけが・疲れなど必要な点は気に掛けていく必要があること，等々より深く多角的に高齢者を捉えることが出来るようになってきていること。

⑤小学生は高齢者から竹トンボの作り方などを熱心に習っており，今の子どもたちもこういう場があれば，こういう活動も決して嫌いなわけではないということ。

⑥赤ちゃんから　幼児，小学生，高校生，大学生，乳幼児の親たち，大学の教職員，地域の民生委員，高齢者と，今回は中学生の参加はなかったが，ほとんど全ての世代がおり，その中で自己の世代として位置が明確になり，広場のスタッフをしながら考えるところが多かった。

⑦遊びに必要なものを作る中で保育の技術的なことも学ぶことが出来た。

⑧発達心理学などでは，授業で聞いたことと実際を結びつけることが出来た。

等々がみられた。今後はさらに教学とどう結びつけていくか等課題がみられる。

また，保護者は，アンケートの他終わった直後の聞き取りを合わせてみると，さきにあげたこととの重複もあるが，総じて次のようなことが言えよう。

①子どもが楽しそうで自分も楽しめ思ったより充実していた。

②「世代間交流の視点」からも「様々な人と触れ合うことが出来，シニアと一緒に遊んだことが楽しかった。」と言う人が多く，世代を超えた交流が楽しめたということがわかった。

③学生が子どもと遊んでくれたので，少しの間子どもと離れることができてほっとする時間がもてたという感想も見られた。言い換えれば学生という世代との交流と我が子から離れて息抜きができたこととの両面が満たされたようである。

④子育ての悩みを相談できたかというとその点は「あまりそう思わない」が多く，今後の課題となった。

⑤しかし，近くのマンションの住人で参加した親がグループを作って話し合ったり一緒に交流したりというニュースも入ってきており，そうした発展も成果であるとともにその点を中心に意識的に聞き取りをしていくなどが課題となった。

⑥そのように意識的になっていく参加者の当事者としての主権をどう保障するかも今後の課題になった。

また，高齢者の場合は，他世代の人たちと関わってどの様に感じられたか，若い親にはアンケートを採ったが，高齢者の方の感想は十分に聞き取れていない。しかし，学生に戦争の頃の話をしているグループもでき，座ってみているだけの人もいたが，毎回参加してこられることからそれぞれに楽しんでいるものと捉えられる。

高齢クラブとは，世代間交流広場をもつ前に，まず高齢者と学生とスタッフが話し合ってきていたので，どの様に広場に参加していくか，当事者としての参加の仕方を一緒に考えていきたい。

NPO 法人のデイサービスの人たちは積極的であり，自分の持っている技術（切り絵），リコーダー等を持ってきて教えてくれる方があり，次回にはそのコーナーを作るなど，自ら参加してきている姿が顕著に見られた。地域づくりを共に考えていける兆しが求められるように思われた。

現在は二つの組織あるいは緩やかな組織からの参加であるが，さらに異なる生活状況にある方々やそれらの方々が高齢者同士の関係もさらに開いていけるような工夫が必要ではないかと思われた。

2．その他の効果 ── 子育て支援から学習支援ボランティアへの発展 ──

小平市立第6小学校の「ふれあいマンデー」（小学校における世代間交流実践）に「世代間交流の広場」のゼミ学生が参加したことが契機となり，心理学科からも12月に「ふれあいマンデー」に参加した。学習支援のボランティアを小学校から要請されて，学生が1～2回行く。合同広場の準備が進む中で，再び2月24日から「子育て広場」にエントリーしている保育科の学生にも広がり，第6小学校へ通うようになる。

12月13日　第6小学校「ふれあいマンデー」に参加（保育科学生3人，教員1人）
第6小学校学習支援ボランティア開始（心理学科の学生）

2月24日　第6小学校学習支援ボランティアを再び開始（保育科・心理学科の学生11人が3月18日まで交代で参加）

2月26日　大学にて学習支援ボランティアの事前学習会（ＡＤＨＤの子どもの対応について，学生9人参加）

子育て支援から保幼・小の関連と障害児の特別支援教育への参加と学生の学習のヨコへの広がりが見られた。

このように地域とつながる広場は，次々に研究と教育の拠点としての大学に要請される課題の宝庫となってくることが見いだされた。

教員としては，こうした発展が常に学生自身の学びになるよう，ある要請に主体的に参加する人，そうではなく，自分自身の他の課題（例えば乳幼児支援）に中心をおく人など，分化と統合の指導をすすめていく新たな必要が課題となった。

3．まとめ ── 地域における子育て支援と相互発達の視点から ──

Ⅰ，Ⅱで述べてきたように理念はかなり明確になってきてはいるものの，まだ，約一年試行錯誤的に実践してきたところであり，確かなことは言えないが，手応えはあったと思われる。すなわち，世代間交流広場は，単なる親と子とスタッフとの広場だけよりも，地域の縦のつながりの場となり，発展の可能性の芽が見いだされた。具体的には成果として次のような点が挙げられる。

広場は単にその開催日においてのみ意味があるのではなく，取り組みの第Ⅱ期に見るように広場を実践するために大学から地域に出かけていくようになったこと。世代間交流において関わりの場の広がりが多角的になったこと。すなわち，幼稚園・保育園はもちろん，市の子育て支援センター，社会福祉協議会，教育委員会，小学校，中学校（今年度から関与），高齢クラブ，NPOシルバーデイサービスセンター，高齢クラブ員のお宅，クラブ員の文化祭の発表会場，等々である。

客観的なアセスメントはしていないが，白梅学園の教職員と学生がこれだけ地域に動き出していることは地域に影響を及ぼしていることは十分予想できる。

たとえば，学校とのつながりで言えば，世代間交流広場への実践的視点をもって国際学会（日本で開催された国際家政学会のポストコングレス）に臨んだ中で足下である小平市立第六小学校の「ふれあいマンデー」の報告に出会い，学生と共に訪ね，それを契機に，学生が学習支援ボランティアに進んで出かけ，小平市のコミュニティースクール計画を知りというように，そして第六小から他の小中学校へと関係が広がりつつある。

また，参加者の感想にあるように学生も乳幼児の親も高齢者との関わりから学んでおり，高齢者からの聞き取りがまだ不十分であるが，進んで，自らの持っている文化的技術を持参して参加して下さるなどその発展の方向が見えてきている。

以上から地域における世代間交流を通した子育て支援の取り組みは，各世代の相互発達への芽を育てたと言えよう。

これも可能性としてではあるが，こうした体験をして保育現場に出た学生たちは保育実践の中に世代間交流を生かし，間接的な子育て支援を広い意味でのコミュニティづくりへの参加と結合させ

て実践していってくれるであろうと見通すことができる。

今後の課題として考察されることは大小さまざまあるが，身近な方から順次挙げていく。

①本学の広場全体の中で，各広場がどう有機的に結合し，役割を分担していくか，その中で，世代間交流広場がどの様な位置において他の広場と関わっていくかという点がある。

それはまた，各広場の独自性と共通性をどう位置づけていくかということにもつながる。

②世代間交流だけの課題ではないが世代間広場では参加層が多角化している中でレギュラー的に関わってきている参加者がどう当事者として参画して行けるかという道を追究していくことが挙げられる。

③こうした「広場」実践のカリキュラムは保育所，幼稚園の実践に比して，どうあったらよいか。支援者の資質はどのようなものかなど，本学の関係する多くの研究者（子ども学科・保育科・心理学科・福祉援助学科）の協力を得て研究する課題があろう。

④参加者の感想をさらに深く捉えること。意識的に調査していない副産物として広場に参加している親同士の関わりが生まれはじめているという状況も出てきているが，そういう点にも研究の側から今後意識して追跡していく必要があろう。

⑤教育の点では，学生の育ちのために，子どもの発達のこと，遊びのこととコミュニティづくりとの関連など，理論と実践を結合しつつ単なる手ではない共通の展望を参加学生たちに育てる上で，また，教職員自身が学習し展望を共有できるために，授業やゼミと関連させるだけでなく，広場独自の学習会も計画していくことが必要に思われる。もちろんゼミや授業との結合の方向をさらに追求することも課題となる。

⑥恒常的な拠点をどう作っていくか，これも，単に世代間交流広場だけでなく，本気で考えていく必要があろう。神戸大学の例のように小平市との提携が出来るためにも実績を作っていくことが重要になる。

⑦教育・福祉とそしてコミュニティづくりに向けて小平市の行政の支援を求めるとともに，市内外の「きらら」（本学の広場参加機関）をはじめとするNPO法人など関係機関と連携を進めるとともにそのあり方自体を科学していくことも課題となろう。

以上で１年目の活動を基にした論述を終える。目下，２年目に向けてとりくんでいるが，10年先を見通した展望を，学園の課題として考え合って行けたらと願っている。

最後にご協力頂いた全ての方に心より感謝申し上げる。

なお本論文は，教育・福祉研究センターの助成金による研究課題「社会とヒューマニズム子育て支援と次世代育成における異世代交流の相互発達的意義と効果に関する研究」の一環であることを記して，謝意を表する。

高齢者に竹トンボの作り方を学ぶ子どもの目の輝きを思い起こしつつ。

注および引用・参考文献

1）こうした議論は，かなりなされているが，世代間交流関係での意見もその一つである。草野篤子「インタージェネレーションの必要性」『現代のエスプリ 444 号』2004/7 pp.5-8

2）杉啓以子（社会福祉法人江東園事務局長）「世代をつなぐコミュニケーション能力と技術」他「座談会：ソーシャルネットワークを創造するインタージェネレーションの展開」『現代のエスプリ 444 号』2004/7 pp. 9-32

3）国際家政学会日本大会ポストコングレス（日本家政学会生活経営部会主催）資料「Study Tour and Discussion on the Cooperative

and Interdependent Family and Community」2004/8 p.22

4）同上　p.23

5）上掲3の国際学会のポストコングレスにおいて上記テーマで，3グループに分かれて各国の研究者が訪問ツアーを行いそのときのBグループ（テーマ：地域三世代子育て支援の事例）のツアー先に選ばれている。

本論には取り上げてないが，上記資料には子育て支援の広場に多世代のボランティアが参加し，異世代交流を発展させているグループも訪問の対象として紹介されている。「堀江つどいの広場」（浦安市），NPO法人「手をつなご」（東京都練馬区），NPO法人「びーのびーの」（横浜市）など。

6）　多湖光宗（ウェルネス医療クリニック）「次世代育成に貢献するグループホーム・託老所」（新しい住まい方部門高齢者痴呆介護研究・研修センター奨励賞受賞実践）詳しい内容は，平成15年度独立行政法人福祉医療機構（長寿社会基金）助成（事業）

報告書　社会福祉法人自立共生会（桑名市）編著『痴呆性高齢者残存能力改善計画書（素案）』

7）松村祥子「地域福祉と世代間交流」2005上掲3）p.39

8)-1 富山市にある民営デイケアハウス（施設長・惣万佳代子）：参考資料ＮＨＫ人間ドキュメント『笑顔の大家族』（2002年5月9日）

8)-2 惣万佳代子『笑顔の大家族』水書坊 2002/11

9）金田利子『生活主体発達論－生涯発達のパラドックス』三学出版 2004

10）厚生労働省のこの事業の報告書は，それぞれの自治体がまとめているが，全体の概要は，この事業の効果に関するアセスメントを目標にした次年度の研究の報告書（注12）の伊志嶺美津子「（モデル事業）実践の成果と課題」pp.2-11 2004/2 にまとめてある。

11）小出まみ「赤ちゃんが教室にやってくる」「“共感の根っこ”実践の効果」同著『地域から生まれる支えあいの子育て』ひとなる書房 pp.220-225　1999

12）金田利子他『研究報告書：年長児童と乳幼児の交流における相互発達と保護者および地域における影響について調査研究』こども未来財団 2004/2

13）金田利子編著『育てられている時代に育てることを学ぶ』新読書社 2003/5

14)-1 松村京子・大路雅子・山口香織「幼児との交流時における高校生の対児行動 ── 対児感情と性別による違い ──」小児保健研究61巻 pp.66-72　2002

14)-2 大路雅子・松村京子「幼児体験学習時の中学生と高校生の対児行動」同上同巻 pp.489-495，2002

14)-3 松村京子「中学生との交流が幼児の遊び行動に与える影響」同上64巻 pp.316-321 2005

15）高山直子「小学生を学びの主体とした“保育教育”－“教室での赤ちゃんとの出会い”から」金田利子編著13）に前掲 pp.80-86 2003/5

16）渡辺（現在本多）和歌子『国民の異世代交流教育に関する研究 ── 家庭科・保育教育の発展的検討か ──』静岡大学教育学研究科修士論文1993 この論文をまとめたものは，「高校家庭科における保育教育の発展からとらえた発達教育の必要性 ── 遊びを中心とした異世代交流実践の効果 ──」というタイトルで，前掲13（pp.122-132）に所収されている。